

書評

『フィールドワーク探求術 —気づきのプロセス、伝える力』

●西川麦子 著

(ミネルヴァ書房、2010年、A5判、180頁、2,310円)

『質的調査の方法—都市・文化・メディアの感じ方』

●工藤保則・寺岡伸悟・宮垣元 編

(法律文化社、2010年、A5判、165頁、2,520円)

●北澤 毅

(立教大学文学部教授)



質的調査法への関心がますます高まるなか、西川麦子著『フィールドワーク探求術』と工藤保則ほか編『質的調査の方法』は、質的調査に足を踏み入れようとする者にとって格好の入門書になると思われる。どちらも平易な語り口でさまざまなフィールドへと読者を誘いながら、読者に身近な世界を探求することの困難と面白さとその世界を探求するための具体的な実践方法を教えてくれる。

西川麦子著『フィールドワーク探求術』では、卒業論文作成時から現在の研究まで、著者自身の調査経験を振り返りながら、フィールドワークを行うにいたった経緯、問題関心の設定、調査方法の選定などが詳しく説明されている。著者のフィールドワークは日本国内での産婆への聞き取りに始まり、バングラデッシュ、インド、イギリスと展開していくのだが、こうしたフィールドや調査目的の変化は、著者をとりまく研究環境やライフスタイルと折り合いをつけていくなかで見だされていく。なかでも前半の「事例編」が面白かった。フィールドワーカーになるプロセス、調査する喜びと困難がよく伝わってくるし、なかでも『『何でもみてやろう』の落とし穴』で紹介されている「生業としての物乞い」の話は興味深い。しかし、物乞いが社会のなかでどのような意味もち機能を果たしているかの分析は紹介されていない。読者は宙づりにされ、西川氏の本を読みたいという気持ちにさせられる。こうした仕掛けは本書のなかに散見されるが、著者がどこまで戦略的に振る舞っているかはわからないがお洒落な演出だと思った。新しいフィールドに入った当初は、調査者はほとんど迷い人のようなものだが、あれこれ手探りでぶつかっていくなかで、当然、異文化への抵抗感も味わい苦しむが、同時に、調査対象社会の広がりや深さを実感できるようになり新鮮な驚きや高揚感を覚えることになる。そうした

調査者としての経験が十分に伝わってくる内容になっており、本書に導かれてフィールドワークの世界に挑戦したいと思う読者が1人でも多く出現することを願いたい。

一方、工藤保則ほか編『質的調査の方法』では、調査方法ごとに章編成がなされているため、読者の関心にあわせて調査方法を知ることができる。たとえば、調査者自身が「バイク便ライダー」の参与者となり、仕事の経験や同僚との交流から得た知識をもとに新たな知見の構成を試みる参与観察法(第5章)、「援助交際」を行う女性たちへのインタビューからその世界を描きだそうとするインタビュー法(第6章)、「具体的な人間」の生に肉薄するためのライフストーリー法(第7章)などが紹介されている。いずれもフィールド調査のなかで採用される方法であるが、質的調査においてはテキストもまた重要な素材となるのであり、日常生活のなかでごく普通に触れている歌詞やアニメを「聴く」「見る」から「読む」対象として接近する方法を提示している(第8章、第9章)。さらに、暮らしのなかのモノと人との関係をフィールドワークから問う方法など(第10章)、手を伸ばせばすぐそこにあるモノから社会を読み解く面白さを読者に教えてくれている。しかし、身近な世界だからわかりやすいということにはならない。本書で一番印象に残った言葉は「違和感」(49頁ほか)であるが、日常風景の一部として何気なく見ているバイク便ライダーの世界も、自分の身を投じることではじめて「違和感」とともにわかることがあるという指摘は示唆に富む。

異文化世界で覚える「抵抗感」、日常世界のなかで覚える「違和感」。調査者が接近しようとする世界に何らかの「ざらつき感」「異質感」を覚えるからこそ探求心が刺激されるということでは両書は共通しているように思った。